松浦武四郎の尻別川探索通過地点の状況（『丁巳東西蝦夷参戦地理取調日誌／報志利辺津日誌』安政4年）

		地点	地形	植生	魚類	野鳥	獣	漁区	ほか		止宿
喜茂別	1	フルホク	坂の下り口、崖、浅瀬、	笹原、赤だも、柳、茅			鹿	エカシクニ（アフタ）、シイトン（ウス）	漁小屋一棟、丸木舟二艘	漁場分割の謂れ	
	2	シュシホク						マキトリ、トモツナ、ヒルクル、シクツカタ（アフタ）			
	3	キモウヘツ	浅瀬、両岸崖	熊笹				カムイサムシ、イトウライ、タンハツ（アフタ）		喜茂別	
	4	ハキイチャン	川浅く小石		サケ産卵、鱒（ホッチャレ）	カラス	山犬、狼、熊、獺	ホロヤンケ（アフタ）	漁場、小屋		止宿①
	5	チヒホラ	両岸峨々						昔漁場ありし		
	6	ヘタヌ	二股	A			鹿	B	昔漁場ありし	鈴川／上流の様子を聞いて引き返した	
	7	オロウェンシリベツ								右のほうの支流	
	8	シイシリペツ					熊、鹿、狐、	（シコツ、アフタ）		左のほうの本流	
	9	マクンヘツ	中洲のある二股	赤だも、柳、熊笹				エカシロシ（ウス）	小屋		
	10	ルウサン		熊笹				マクレサバ（アフタ）	番屋小屋	留産／当川筋第一番の漁場	
	11	タツコプ	小さき丸山、								
	12	ブイラボク	急流岩石峨峨	トクサ、オニノヤガラ				フツチラク（ウス）	小屋、船上げ		
	13	イネブユニ	大岩峨峨								
	14	イシュイカリウシ	両岸崖、急流					エナオテキ（アフタ）			
	15	ベンケメナ	少しの平地	あかだも、やなぎ、熊笹							

		地点	地形	植生	魚類	野鳥	獣	漁区	ほか		止宿
京極	16	カシュッフ	フィラ、岩石峨峨					オヘイカリ（アフタ）			
	17	サツテキナイ	浅瀬、両岸崖						小屋（アフタ）		
	18	バンケメナ		熊笹	マス（ホッチャレ）		狐、鹿、熊、獺	ホカシラン（アフタ）		この下には漁場無し	止宿②
	19	ワツカタサ	峨峨たる平							脇方	
	20	ヘビナイ									
	21	ヘビナイビラ	転太石	トドマツ、エゾマツ			狐、熊				
	22	タンネブイラ	長き滝						荷物負い下げ		

		地点	地形	植生	魚類	野鳥	獣	漁区	ほか		止宿
倶知安	23	フルフウキイ	ブイラ						荷物負い下げ		
	24	バンケフィラ	大フィラ						荷物負い下げ		
	25	マクンベツ									
	26	ヌプリカンベツ	平地	あかだも、やなぎ							
	27	フシココタンウシ	瀬と渕							大昔アイヌ居住	
	28	ホロイチャン	転太石		鮭				荷物負い下げ	八幡付近	
	29	無名小川								六号付近、名前誰も知らず	
	30	無名小川								ヨイチ岳源流	
	31	ナンベツリ	平地								
	32	ソウツケ	渇水	あかだも、やなぎ	うぐい、鮭、鱒、チライ、アメノウオ、イワナ			セベンケ（イワナイ）	小屋	倶知安付近 川口に木幣、	止宿③
	33	クッシャニ			うぐい、鱒、チライ、アメノウオ					倶知安川 ヨイチ岳源流	
	34	ヘンケユワオベツ	遅流にて深い							岩内岳源流	

C D E

35	無名小川	遅流にて深い	あかだも、やなぎ							
36	無名小川	遅流にて深い	あかだも、やなぎ							
37	ヒラ									
38	川中一ツ石									
39	川中岩石多し									
40	岩石多き処									
41	滝川	両岸峨峨								
42	第一番ブイラ	峨峨たる岩石						船上げ	・シリベツ岳！	
43	マクンベツ	（枝川のこと）	あかだも、やなぎ							
44	第二番ブイラ	マクンベツ								
45	第三番ブイラ							船を縄で引く		
46	第四番ブイラ							船上げ		
47	第五番ブイラ		トドマツ、カラマツ					船を縄で引く		
48	第六番フィラ							荷物負い下げ	岩尾別辺り	
49	第七番フィラ							船を縄で引く	シリベツ岳（羊蹄山！）	
50	第八番フィラ	両岸峨峨							比羅夫辺り シリベツ岳にカムイノミ	止宿④
51	第九番フィラ							荷物負い下げ		
52	第十番フィラ	両岸峨峨						荷物負い下げ		
53	第十一番フィラ	両岸大岩重畳						船上げ		
54	第十三番ブイラ							船を縄で引く		
55	第十四番ブイラ							船引き下げ		
56	第十五番ブイラ	両岸峨峨						船引き下げ		
57	第十七番ブイラ	西岸にマクンベツ							比羅夫駅西方	

F

G

	58	第十八番ブイラ	少しの砂浜			かのこどり、やませみ、きたかわがらす、わし、たか	熊		H	比羅夫駅南方 樺山付近 カムイノミ	止宿⑤
	59	第十九番フィラ									
	60	第二十番フィラ	羊蹄山、岩内岳	松					荷物負い下げ		
	61	第二十一番フィラ									
	62	第二十二番フィラ							荷物負い下げ		
	63	第二十三番フィラ									
	64	第二十四番フィラ									
	65	第二十五番ブイラ	峨々たる岩壁						荷物負い下げ		
	66	第二十六番ブイラ（シベチャン）	峨々たる岩壁、大転太石						船上げ	当川筋第一番の難所 シベチャン マサカリの刃の跡	
	67	第二十七番フィラ	西側マクンベツ						荷物負い下げ		
	68	第二十八番フィラ							荷物負い下げ		
	69	第二十九番フィラ							荷物負い下げ		
	70	第三十番フィラ	少しの砂浜	トドマツ、雑木、柳			猛獣の鳴き声		流木打上げ、鉞の跡シベチャン イリカのこと、	大曲付近 カムイノミ	止宿⑥
	71	第三十一番フィラ									

		地点	地形	植生	魚類	野鳥	獣	漁区	ほか		止宿
ニセコ	72	第三十二番フィラ	マクンベツあり						荷物負い下げ		
	73	第三十三番フィラ							荷物負い下げ		

町	74	第三十四番フィラ	小転太石						船下げ置き		
	75	第三十五番フィラ	大転太石						荷物負い下げ		
	76	第三十六番フィラ							船下げ置き		
	77	第三十七番フィラ	砂浜少し						船下げ置き、鉞の跡	止宿の跡	
	78	第三十八番フィラ							船引き下げ		
	79	第三十九番フィラ	川中数丈の岩						荷物負い下げ		
	80	第四十番フィラ							荷物負い下げ		
	81	第四十一番フィラ							荷物負い下げ		
	82	第四十二番ブイラ							船引き下げ		
	83	第四十三番ブイラ							船流し下げ	真狩川口	
	84	マッカリベツブト	南より川合流（真狩川）					イトカン、ソウロク（アフタ）	小屋テッシ	シリベツ岳マッカリベツノボリ、カムイノミ	
	85	第四十五番フィラ	マクンベツあり								
	86	第四十六番フィラ							荷物負い越し		
	87	第四十七番フィラ									
	88	第四十八番フィラ							荷物負い下げ		
	89	第四十九番フィラ	右にヒラ赤土崩岸						船流し下げ		
	90	第五十番フィラ	マクンベツあり						船流し下げ	富川付近	止宿⑦
	91	第五十一番フィラ							荷物負い越し		
	92	第五十二番フィラ							荷物負い越し		
	93	第五十三番フィラ							荷物負い越し		
	94	第五十四番フィラ	マクンベツあり						荷物負い越し	岩内硫黄山の峰遠望	
	95	第五十五番フィラ	マクンベツあり川口4分岐						荷物負い越し		
	96	第五十六番フィラ							船流し下げ		
	97	第五十七番フィラ							荷物負い越し		
	98	第五十八番フィラ	マクンベツあり						荷物負い越し		

I J K

	99	第五十九番ブイラ	マクンベツあり少しの砂浜	トドマツ					荷物負い越し	黄金付近	止宿⑧
	100	第六十番ブイラハンケイワオナイ	東小川硫黄の気						荷物負い越し		
	101	第六十一番フィラ	マクンベツあり						荷物負い越し		
	102	第六十二番フィラ							荷物負い越し		
	103	第六十三番フィラ	マクンベツあり						荷物負い越し		
	104	第六十四番ブイラ							荷物負い越し		
	105	第六十五番ブイラ							荷物負い越し		
	106	第六十六番ブイラ							荷物負い越し		
	107	第六十七番ブイラ	転太石								
	108	第六十八番フィラ	マクンベツあり	トドマツ					荷物負い越し		
	109	第六十九番フィラコンホブト	コンホブト合流河口	トドマツ	マス、サケ、チライ			レフンキ、ヘンヘのアイヌの漁区	船流し下げ	わらじの古き、木の伐枝、丸小屋の跡、和人が仕掛けた留網が捨置、アイヌの怒り、アイヌの猟小屋、カムイノミ	

		地点	地形	植生	魚類	野鳥	獣	漁区		ほか	止宿
蘭越町	110	第七十番フィラ	転太石、河原、マクンベツあり						船流し下げ		
	111	第七十一番急流							船流し下げ		
	112	第七十二番急流							船流し下げ		
	113	第七十三番急流タタラ							船流し下げ	礒谷山稼等が云うタタラの跡	
	114	無名小川									
	115	第七十四番急流							船流し下げ		
	116	無名小川									
	117	第七十五番急流							船流し下げ		
	118	第七十六藩							船流し下げ	岩内岳	
	119	第七十七番急流							船流し下げ		

L

M

N

	120	第七十八番急流							船流し下げ	東に丸山	
	121	第七十九十番急流							船流し下げ		
	122	第八十番急流 ホロハッタラ	深い淵						船流し下げ		
	123	無名小川（ヘンケオイカルカルシ）	赤土崩平、小石浜								
	124	ハイブチ		藤（這藤）						山稼小屋、熊石村甚四郎や礒谷の五右衛門のこと／東蘭越付近	止宿⑨
	125	パンケヲイカラカルウシ								昔開山なりしフトロコタン（和人）	
	126	マクンベツ三筋									
	127	クスリヲロワヤンベツ	源に温泉有り								
	128	チライウシケヘリペツ									
	129	タンネヒウカ									
	130	セタワッカ								小屋に山稼人二人居た	
	131	南部川（ヤサツタラ）								昔南部の者入山	
	132	タンクシナイブト	遅流にて深し	柳						ランコシナイ（蘭越）	
	133	トベトイ（赤洲）									
	134	シキナシナイ		柳							
	135	ホロシュシュタイ		柳							
	136	ベツシナイ		菅					一度来た所	所々に丸小屋の跡	
	137	シャマツケウツカ							一度来た所		
	138	ポロトウフ							一度来た所		
	139	ホロナイ							一度来た所		
	140	ホロウタ							一度来た所		

O

P

Q

R

	141	メナブト								目名川口／上陸して小屋に入り昼食	
	142	ペンケメクン								目国内川／材木多く出し	
	143	パンケメクン									
	144	ヲイタルウシ他・・							志利辺津日誌に記載済み		
	145	渡場え	尻別川河口		帆立貝漁			磯谷運上屋	カムイノミ	スッツへ	止宿⑩
	146	スッツ								磯谷川筋で留網、川口で張切網の状況を報告し、処置を願出	

注

A 喜茂別から京極にかけての尻別川流域の植生は、熊笹、柳、赤だもが主体となっている。トドマツやエゾマツはほとんど記録されていない。このエリアでは、Bに記すように、アイヌの鮭漁が行われていて、人が入りやすいエリアであった。そのため、特にこのエリアでは、18世紀初頭エゾマツやトドマツを伐採していた飛騨久兵衛や、19世紀に請け負った柳家庄兵衛の乱獲も影響して、このような植生に移行した、と考えられる。
因みに、現在の現存植生図（環境省）では、このエリアのほとんどが、ヤナギ高木群落とヤナギ低木群落である。

B 武四郎が、この年3度目に尻別川にアクセスした地点フルホク（今の喜茂別超相川）から、上流に遡上して途中から折り返したヘタヌ（今の喜茂別町鈴川）辺りから下流に下ってパンケメナ（今の京極町川西）までは、アフタアイヌとウスアイヌの漁区となっていた。噴火湾のそれぞれのコタンから、秋になるとサケ漁のためこの地に来て晩秋まで滞在し特にホッチャレを冬の保存食として持ち帰った。この季節だけの漁小屋や丸木舟が、各漁場に据えてあった。この流域随一のサケ漁場は、ルウサン（喜茂別町留産）とされていた。
この流域エリアは、パンケメナの下流部でプイラが多く、漁場としては使いにくい地形的要因があったためと思われる。結果的に、漁場が多いこの流域エリアには、きめ細かく地名が付けられていた。
なお、このエリアがアフタアイヌとウスアイヌの漁場となった経緯については、フルホクに到着した時点で、以前、アフタ、ウスのアイヌの古老から聞いた話として紹介している。それによると、何百年も前のこと、アフタとウスのアイヌが山猟に出てシリベツ川に至り、そこがサケの豊かな飯料場であることがわかったので、川全体の持ち主であるイソヤアイヌに相談して、上流の一部をアフタ・ウスの飯料場として買い取ることにしたという。その際、その境界としたのは、フイラにより船の渡航が困難な場所とした。また、下流域では、上流域に鮭が遡上できなくなるような張切網の様なものは設置しない約束となった。

C 倶知安上流部にあたる尻別川流域の植生は、注Aの延長であり、柳、赤だもが主体となっている。このエリアの下流域との境界は第一プイラのあたりとなっていて、それより下流域のプイラ頻出ゾーンに入ると、植生は大きく変わる。（→注G、Jを参照）プイラ頻出ゾーンが、流域の植生に影響を与えている可能性を示す現象だが、しかし、自然生態系として影響を与えているというよりも、流域の木材伐採に関する歴史的人為的な原因によるものと考えられる。

D プイラが頻出するエリアの上流域からプイラ頻出エリア全域にわたって、チライが観察されている。下流域のコンホフトに仕掛けられた留網より下流域での観察記述はないので、少なくともコンホフト上流の全域ではチライが多く生息していたと思われる。

E ソウツケ（倶知安）は、支流ソウツケ川が尻別川に注ぐあたりで、この一帯は、イワナイアイヌのセベンケの持ち場所であることが記されている。詳しい状況については、『丁巳第二巻曽宇津計日誌』に記されている。武四郎は、安政4年の尻別川探索にあたって、2度目のチャレンジとして、5月に岩内から稲穂峠を越えてソウツケにアクセスしたが、そこから上流へも下流へもプイラに阻まれてたどることができずに断念している。

F プイラ（激流ポイント／日誌には、ブイラ、フイラとも記されているが、その相違はわからない）が、第1番から第80番まで連続して続く流域エリアが、倶知安から蘭越まで続いている。このエリアは中流域なので、蛇行区間にプイラが一つというのが通常の形態だが、この尻別川では、中流域にプイラが密集していて、蛇行区間に複数のプイラが続いている。いわば、この区間は上流域のような様相を呈している点で、極めてユニークな地形と言える。このエリアは、プイラが連続して人間が立ち入ることは極めて困難だったことから、イソヤアイヌ、イワナイアイヌ、アブタアイヌ、ウスアイヌの漁区を自然に区切る境目となっていた。また、このプイラ頻出ゾーンは漁区にはならなかったので、アイヌによる地名も付けられなかった。いわば、尻別川の秘境と言ってもよいエリアである。

G 武四郎の時代に尻別川流域でエゾマツやトドマツが観察されたエリアは、現在の倶知安町内のプイラが連続して続く流域沿い（G）とニセコ町内の流域沿い（J）に限られている。それ以外の流域沿いは、注A、Cに述べたように、柳、赤だも主体の植生となっていて、際立った違いを見せている。これは、潜在植生としての相違ではなく、人為的な影響による違いと思われる。1702年に松前藩と場所請け負い契約を結んだ飛騨屋久兵衛は、尻別川を遡行して奥地まで和人やアイヌの作業人夫を送り込み、エゾマツやトドマツなど木材資源価値の高い樹種を中心に伐採を進め尻別川で流送した。このため、流域一帯のエゾマツやトドマツなどは次第に姿を消していったが、プイラの続く流域エリアでは、伐採に入り込むことも流送も困難なので、他のエリアと比べて伐採が少なかったものと見られる。さらに上流部からの流送もプイラ地帯で引っかかる材木が少なくなく、武四郎の日誌にも、第30番フィラで止宿した際に多くの流木を目撃しているし、同行のアイヌたちから、木材伐採によって非業な最期を遂げたアフタアイヌのイリカのエピソードを聞き記している。飛騨屋久兵衛は、尻別川では思うような利益を上げられなかったという記録もあるが、このプイラが原因の一部かもしれない。また、1818年には、柳谷庄兵衛が松前藩と契約し、同じような事業を行なっている。この時にもおそらくエジマツやトドマツなどの樹種を狙って皆伐が行われただろうから、人為的な植生の変化の影響がその後も続いていると受け止めることができる。

H プイラに遭遇した武四郎一行は、プイラの激流の程度に応じて、いく通りかの方法で乗り越えた。比較的ゆるいプイラでは、丸木舟に荷物を積んだまま人間は川の中に降りて船を引いて下げたり、川岸に降りて縄で船を引張った。もう少し激しいプイラでは、荷物を人間が背負って空の丸木舟を引いた。そして、それでも難しい激しいプイラでは、丸木舟ごと川岸に引き上げてプイラをかわしてから再び船を川に下ろした。このため、プイラが頻出する倶知安からニセコにかけての流域では、1日に短い距離しか進むことができなかったし、一行は果たして目的地にたどり着けるかどうか不安な面持ちで、止宿した場所で川の神、山の神にカムイノミを捧げている

I Fの続き（ニセコ町域）

J Gの続き（ニセコ町域）だが、プイラ越えに専念したと見えて、周辺の植生の観察は疎かになっているように見える。しかし、思い出したような観察記録からは、プイラ流域に残されていたトドマツが記録されている。ちなみに現存植生図では、ニセコ町域の流域には、常緑針葉樹植林帯が見られる。

K Hの続き（ニセコ町域）

L F、Iの続き（蘭越町域）で、第80番急流まで

M H、Kの続き（蘭越町域）

N 武四郎一行は、第69番フィラ（コンホプト）で、礒谷から尻別川を遡上して奥地に入り込んだ和人の活動の痕跡を見出した。コンホプト（昆布川が尻別川に合流する辺り／第69番フィラ）では、丸小屋の跡と和人が仕掛けた留網が放置されているのを見つけたアイヌは、最初、人里が近くなったと理解し喜んだが、すぐに、この留網が仕掛けられたために、その上流にサケが遡上しなくなっていることに気が付いて激怒したことが、記されている。これで、武四郎がこの尻別川探索の旅の目的の一つとした、下流域で和人が違法な網を仕掛けているために上流域で漁をしているアイヌが困っているのではないかという疑いが、立証されたことになった。武四郎一行は、この後、イソヤ場所までたどり着いてからスッツ場所に行き、スッツ詰調役長谷川儀三郎と会い、コンホプトの留網の件を報告し、適切な処置を強く申し入れている。
また、コンホプトから少し下った第73番急流地点では、礒谷の山稼などから聞いたことがある製鉄用のタタラ（ふいご）の痕も見つけているので、この流域一帯に、和人の活動の跡が残されていたことになる。

O 第80番急流が終わったところ、現在の東蘭越あたりから、地名が復活している。和人やアイヌがここまで遡上して生活圏にしていたことを物語っているが、この地名の多くは、この安政4年の4月から5月にかけて武四郎が最初に礒谷から尻別川沿に遡上を試みた時の記録『丁巳第一巻　志利辺津日誌』（『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』所収）に記載された地名と重なっているが、相互に異なる地名も記載されている。
その一つとして、東蘭越辺りの地名にハイブチが記載されているが、記述によると、この地で和人がかつて植えた藤の蔓が伸びていたことから「這藤（かいふじ）」が訛って「ハイブチ」になったという。和人の生活圏がここまで伸びていたということであるが、ここまでは船で楽に遡行できたからとも記されている。そして、この先上流へは、船を縄で曳きながら遡ればコンホまで行くことができ、さらにコンホから堅雪を踏んで遡行すればハンケイワヲヘツ（第60番ブイラ辺りで本流に注いでいるハンケイワヲナイの事か／黄金付近）まで行けるとあるので、それぞれの地点までが、礒谷の和人の行動範囲であったということになる。

P プイラが終わる辺りから、流域の植生が再び変わって、柳やスゲが主体となる。これは、上流部の喜茂別から京極、倶知安の上流部辺りまで、すなわちプイラ未収地ではない流域エリア（注A、C）とほぼ同様である。このことからも、注Gで述べたような流域森林伐採の歴史的影響が見られる。

Q この流域エリアは、イソヤアイヌの漁区であることから、その概要については『丁巳第一巻　志利辺津日誌』に記載されているが、ここでは詳述を省く。

R 第80番急流ポイントが終わって礒谷の河口までの流域エリアには、随所に和人の活動の跡が記録されている。その個々については、『丁巳第一巻　志利辺津日誌』の記述と照合しながら辿る必要があるので、別の機会に譲ることとし、ここでは言及しない。

参考文献	『丁巳東西蝦夷山川取調日誌／第十九巻報志利辺津日誌』、『丁巳東西蝦夷山川取調日誌／第一巻志利辺津日誌』、『丁巳東西蝦夷山川取調日誌／第二巻曽宇津計日誌』、現存植生図（ニセコ、倶知安ほか）

2018.11.23/梅田滋